

東高 1 年の歩み

2024年12月2～6日
修学旅行

5年ぶりに、台湾修学旅行が実施されました。台南コースと台北コースに分かれ、高級中学生との交流や観光を楽しみなが、学びの多い時間を過ごしました。十份老街や九份などの観光名所で台湾の文化や歴史に触れました。



2025年3月1日
卒業式

穏やかな春の日に、第98回卒業式が挙行されました。卒業生276名の代表として元生徒会片岡素良さんに卒業証書が授与されました。また、松下清香さんが陸上部での思い出を交えて、答辞を述べました。



2025年4月28日
H Rデー

1年生は、藤枝市内各地を巡る「藤枝リエンテリング」を行いました。2年生は、三嶋大社で解散し、別班別修を實施し、修学旅行の予行練習をしました。3年生は、クラスごとに横浜、富士山エクス、浜松方面などへ出掛けました。



2025年5月30・31日
千南祭

新校舎で初めての文化祭が開催されました。一部の食販ブースではQRコード決済サービス「PayPay」を導入しました。また、報道部が東校限定「誠」の焼き印入りどら焼きを販売するなど母校愛があらわれました。



2025年6月13・16日
球技大会

熱中症対策のため本年度より6月開催となりました。生徒たちはクラスごとにデザインされたお揃いのTシャツを着用し、各競技に臨みました。種目はサッカー、バレーボール、卓球で、体育の授業での練習の成果を発揮しました。



2024年10月2日
体育大会

開会式では、サッカー部主将の村上樹さんが「100周年の記念すべき年に『伝統と新風』の心意気で、本日の体育大会を盛り上げましょう」と力強く宣誓しました。台風の目りレーや15人16脚などの種目で、絆を深めました。



2025年2月5日
マラソン大会

前日までの穏やかな天候から一転し、寒波が到来した強風の中、男子12キロ、女子7キロコースで実施されました。幼稚園児や保護者の声援に囲まれて、多くの生徒が完走しました。終了後、皆すっきりとした笑顔を見せていました。



2025年4月7日
入学式

少し緊張した面持ちの新入生294名が、入学しました。多くの祝辞には、励ましの言葉と応援の想いが込められ、会場全体が温かな祝福の空気に包まれました。H Rの森野心奈さんが、爽やかに宣誓をしました。



2025年5月15・16日
演劇教室

今年は東京芸術座による「医者玉子」が上演され、進路に悩む若者と親や東日本大震災で子供を亡くした家族、葛藤が描かれ、自身の生き方について考えさせられました。バックステージツアーや座談会にも多くの生徒が参加しました。



2025年6月6日
夏服にボロシャツ導入

暑い夏を快適に過ごすための新たな制服スタイルとして、ボロシャツを導入しました。従来のシャツに加えて、白または紺のボロシャツを選択できるようにしました。「風通しがよくて涼しい」「動きやすくて快適」好評です。



いつもこころの片隅に



社会福祉士
大内 弥生 (旧姓・錦野)
(63回、1990年卒)

随 想

2024年6月29日、私は初めて旧校舎の天文台にのぼった。旧校舎解体前に同窓生に旧校舎が開放された日のことだ。高校時代3年間通った校舎だったにもかかわらず、天文台には一度も足を踏み入れたことはなかった。中は古い机がいくつもあるだけで、がらんとしていたが、天井はドーム型になっており、やはりここは天文台だったんだと再認識させてくれる。私にとってこの場所は特別に思い出があるところではなかったが、校舎が解体され、いざなくなってしまうとなると、急にノスタルジックな気分が襲われた。あることが当たり前と思っていたのが失われる。それがただけ自分の心にはぼっかりと穴をあけるのか。屋上には私は私と同じ思いになっているのか、多くの卒業生が天文台にのぼったり、写真を撮っていた。この景色はもう見られ

ない、しっかりと心に焼き付けておこう、そう思った。高校生の頃、私は正直落ちこぼれていた。入学したとたん、数学についていけなくなり、化学の授業が宇宙語のように感じた。授業が分からない、分からないことも分からないという初めての経験を。それまで楽しく学校に通っていたのは、人の価値が成績ではなかったからだと思っ。高校には今まで会ったことのないような個性の持ち主が溢れていた。そして、その個性を排除することなく、なににこまなくように受け入れてくれていた。現在、世の中は多様性の時代であることを強調し、いろいろな価値観の人を認めることを強めているが、38年前すでにそれはここにあった。本来、多様性は強いるものではなく、自然にそこにあるものなのだと思う。私は今、クリニックで相談業務について

ている。病気やケガ・環境の変化などにより生活に不安や困ることがある方の相談を受けている。私が常に心掛けているのは、「○○の疾患のAさん」ではなく、それまでいろいろな経験をして生きてきたAさんであるということ。「○○の疾患の人」としてひとくりにするのは、それまで生きていく支援ができていた。ただひとりAさんとするのではなく、たとえ病気があってもAさんがAさんらしく生きていく支援ができていたのでは思っている。その人らしさを認め、価値観を享受する大切さは、高校時代に学んだ。私たちは来年、55歳を迎える。今、同級生たちと26年7月19日に同窓会を企画している。あの個性の持ち主たちがまた一堂に会し、どんな空気が生まれるのか。今から楽しみだ。

素晴らしきサポートメンバー



元警察庁警備局長
櫻澤 健一
(55回、1982年卒)

随 想

選任を過ぎた今も時々当時の「夢」をみる。高校生活の全てを捧げたバレーボールで最も苦しかったサーブレシーブの居残り練習のシーンだ。次々打たれるサーブを必死で拾おうとしても、失敗の連続。冷や汗をかくて目を覚ます。超高校級エース横山晋也君を擁しながら県準決勝を突破できず、故池谷朗先生を全国大会に連れて行けなかった悔しさが忘れられないのが原因だろうか。縁あって私は警察庁に入り、35年にわたり勤務した。警察官はVドラマでは専ら悪役のようなだが、その仕事は個別事件の指揮を執るだけでなく、霞が関の役人として生活安全や道路交通行政、国際テロ・組織犯罪対策等の立案や実行を担い、国会審議への対応、国際的な協議等も担う。しかし最も重要なのは、巨大組織の管理であり、

常に「外からも構成員からも信頼される組織を作りたい」と努力してきた。何度も苦汗を流しながらも、その中で確信している組織づくりの要諦は、リーダーや後援者だけでなく、縁の下の力持ちや次世代への準備役、嫌われ役やムードメーカーが、それぞれの立場でやりがいを感じて共に助け合い成長することだと思っ。その原点が高校時代にある。当時のバレーボール部のサポートメンバーは素晴らしい。マネージャーの八木邦明君は練習メニューを監督に代わり作り上げて、練習コーチ役、ピンチサバーとして強豪チームに恐れられた田田明裕君と辻宏之君は、今のルールならスパーバリエロとして活躍しただろう。他チームなら当然レギュラータックカーだった北野寿一君と中学時代から一緒だった阿部博一君は、専ら後輩たちの指導役を引き

受けてくれていた。彼らの積極的な働きがチーム全体の能力とエネルギーを高め、インターハイに向けての数か月は、工夫を凝らした練習が効率的、自主的にできる高校生とは思えないハイレベルにあったように思っ。それぞれ社会人として異なる道に進んだが、彼らは今も活躍中だ。例えば八木君は小学校長まで勤めた後に、生徒と社会人が協働して価値を生み出す探求プログラムを先導するシヅクリプロジェクトを創業し、北野君は子どもたちの心に灯をともす教育活動を長年実践した教員として表彰を受けた。忙しかった時代は無理であったが、人生に大きな影響を与えてくれた仲間と会って更に刺激を受けたいと思う最近である。夢を見るのはそのせいだろうか。現（一般財団法人「日本サイバー犯罪対策センター」業務執行理事

藤枝東高等学校同窓会
令和 6 年度 維持費集計（回別）

維持費の納入金額が年々減少しています。下記内容を参照され卒業回別の横のつながりを強化していただき一人でも多くの方が会費納入にご協力くださるようお願い申し上げます。
参考：30回（昭和32年卒） 40回（昭和42年卒） 50回（昭和52年卒） 60回（昭和62年卒） 70回（平成9年卒）

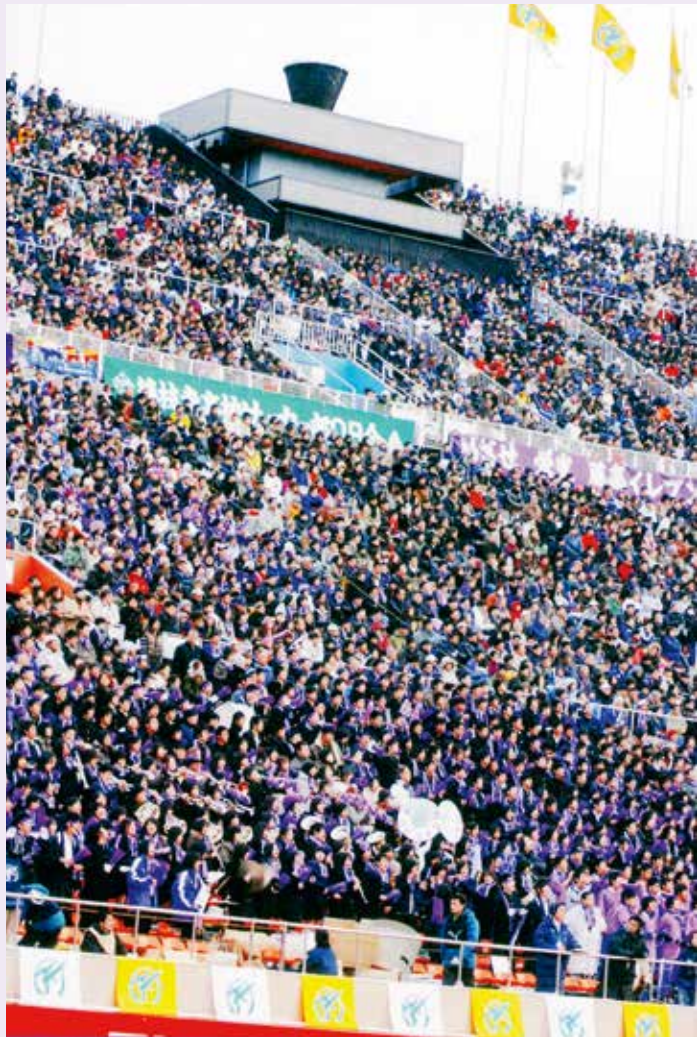
回	金額	回	金額	回	金額	回	金額	回	金額	回	金額
5回	6,200	32回	57,000	46回	97,000	60回	33,400	74回	10,200	88回	10,600
13回	4,200	33回	74,600	47回	145,600	61回	38,000	75回	2,200	89回	8,600
18回	2,200	34回	90,000	48回	113,000	62回	42,000	76回	20,400	90回	6,400
21回	6,200	35回	114,600	49回	71,000	63回	49,600	77回	4,000	91回	9,400
22回	6,400	36回	100,800	50回	110,800	64回	23,400	78回	19,200	92回	14,600
23回	12,200	37回	46,400	51回	66,400	65回	32,400	79回	14,800	93回	6,400
24回	6,400	38回	159,000	52回	94,800	66回	41,600	80回	6,400	94回	19,000
25回	18,800	39回	348,600	53回	57,600	67回	27,600	81回	8,400	95回	17,200
26回	19,200	40回	168,800	54回	40,200	68回	23,000	82回	2,200	96回	13,000
27回	17,600	41回	118,800	55回	64,200	69回	33,400	83回	4,200	97回	36,800
28回	98,200	42回	103,800	56回	236,690	70回	12,800	84回	10,400	不明	4,000
29回	68,000	43回	66,200	57回	57,800	71回	16,800	85回	8,400		
30回	35,600	44回	90,800	58回	62,600	72回	0	86回	8,200		
31回	61,800	45回	97,000	59回	52,600	73回	2,200	87回	6,400	合計	3,917,290

※56回の金額のうち162,290は56回生一同から

令和7年3月

サッカー部誕生100年

栄光の足跡をたどる



1926年、志本サッカークラブが産声を上げた。初代校長の錦織兵三郎がサッカーを「校技」と定め、全校生徒でボールを蹴り始めてから2年後、浜松師範学校でサッカー経験のある山口秀三郎を指導者に迎え入れ、のちに全国を躍する蹴球軍団がスタートした。当初は先輩各校の厚い壁に跳ね返されたが、31年、初めて挑んだ全国舞台で頂点に立った。東京文理大主催の全国中等学校蹴球大会。初戦で本郷中（東京）を4-0で下して勢いに乗ると決勝に

戦後の全国大会優勝回数			
大会名	出場回数	優勝回数	優勝年度
全国高校選手権大会	25回	4回	1962、63、66、70
全国高校総合体育大会	13回	2回	1966、71
全日本ユース選手権大会	4回	2回	1992、98
国民体育大会	12回	2回	1957、66
(1970年度からは県選抜)			
五輪、W代表選出選手			
年	大会名	選手名	(卒業年、出場時の所属チーム)
1936年	ベルリン五輪	世野橋次	(1932年卒、早大)
1964年	東京五輪	松永 行	(33年卒、東京文理大)
		高沢清司	(62年卒、八幡製鉄)
		山口芳忠	(63年卒、中大)
		富沢清司	(新日鉄)
		山口芳忠	(日産)
1968年	メキシコ五輪	村松大輔	(2008年卒、清水エス・バルス)
2012年	ロンドン五輪	中山雅史	(1986年卒、ジュビロ磐田)
1998年	W杯フランス大会	長谷部誠	(2002年卒、ヴォルフスブルグ)
2010年	W杯南アフリカ大会	長谷部誠	(ニルンベルク)
2014年	W杯ブラジル大会	長谷部誠	(E・フランクフルト)
2018年	W杯ロシア大会	長谷部誠	(E・フランクフルト)

山陽（広島）を退け、初めて日本一の座に就いた。国体制覇から5年後の62年度、今度は全国高校選手権を初制覇。翌63年も勝ち抜いて、選手権連覇を達成した。次に輝いたのは66年度。この年度から始まった全国高校総体を制するも、国体でも優勝。全国選手権は決勝で秋田商と引き分け、優勝を分かち合ったが、初の全国三冠を達成した。単独Vを達成できず、選手たちに笑顔はなかったが、練習試合を含め1年間負け知らずと強さは際立っていた。70年度の全国選手権決勝は「藤枝東・浜名の静岡対決となった。東高は県予選を制し、浜名は夏の全国総体王者として出場権を得ていた。ここで勝負差を發揮、選手権史上初の同県V決戦を制して優勝旗を持ち帰った。翌71年度の全国総体は苦しみながらの県予選突破だったが、全国では順当に勝ち上がって決勝に進出、広島工を3-10で圧倒した。

クラブと高校が同じピッチで競い合う全日本ユース(U-18)。発足2年後の92年度、ブロック予選を勝ち抜くと本大会も決勝に進出。読売杯を3-1と圧倒して、71年度山陽（広島）を退け、初めて日本一の座に就いた。国体制覇から5年後の62年度、今度は全国高校選手権を初制覇。翌63年も勝ち抜いて、選手権連覇を達成した。次に輝いたのは66年度。この年度から始まった全国高校総体を制するも、国体でも優勝。全国選手権は決勝で秋田商と引き分け、優勝を分かち合ったが、初の全国三冠を達成した。単独Vを達成できず、選手たちに笑顔はなかったが、練習試合を含め1年間負け知らずと強さは際立っていた。70年度の全国選手権決勝は「藤枝東・浜名の静岡対決となった。東高は県予選を制し、浜名は夏の全国総体王者として出場権を得ていた。ここで勝負差を發揮、選手権史上初の同県V決戦を制して優勝旗を持ち帰った。翌71年度の全国総体は苦しみながらの県予選突破だったが、全国では順当に勝ち上がって決勝に進出、広島工を3-10で圧倒した。

の全国総体以来、21年ぶりに全国タイトルを手中にした。6年後の98年度、全日本ユースのピッチで再び光彩を放ち、G大阪ユースを退けて頂点に立った。21世紀に入り、存在感を示したのは2007年度の全国選手権。最後に流通経大柏（千葉）に屈したが、34年ぶりの決勝進出とあって、国立競技場のスタンドは藤色のマフラ軍団で埋まった。写真。五輪。W杯の舞台でも志太中、東高OBが躍動した。1936年のベルリン五輪で松永行（東京文理大）と世野橋次（早大）が代表入り。64年の東京五輪と4年後のメキシコ五輪に富沢清司（八幡製鉄、新日鉄）、山口芳忠（中大・日立）が出場。メキシコ五輪では日本の銅メダル獲得に貢献した。44年後、2012年のロンドン五輪に村松大輔（清水エス・バルス）が代表入り、東高5人目の五輪戦士となった。日本がW杯に初めて出場した98年のフランス大会で、中山雅史（〇〇ロ磐田）が日本唯一の得点をたたき出した。長谷部誠（ヴォルフスブルグ・ニルンベルク）が日本唯一の得点。18年のロシアと3大会連続、キャプテンマークを巻き、日本代表をけん引した。